
ずっと、ここで待ってるのに。

マサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと、ここで待ってるのに。

【Nコード】

N7753R

【作者名】

マサキ

【あらすじ】

俺たちは、友達？

そう、友達……

でも、友達とはキスなんてしないよな？

なら、俺たちはどんな関係にあたるんだろうか……

純愛BL…目指します
↑

プロローグ（前書き）

BL、好きだけど……

自分で書いてしまってもいいのか、悩みました。

自分の理想のBLを全力で、詰め込みます。

プロローグ

他に誰もいない2人きりの教室……

カーテンに出来る皺……

寄り添う夕暮れの影……

2人にしか聞こえない……

浅い吐息……

触れ合う。

何もかもが崩れていく。

友達だったはずで……

俺には、絶えず彼女がいたはずで……

アイツは、1人だって彼女をつくったことがなくて……

触れ合う。

何もかもが崩れていく。

友達だったはずの2人……

ただ、これからもそんな普通の関係でいられると思ったんだ。

俺が彼女にフラれて、アイツが慰めてくれて。

ただ、それだけなのに……

それだけだったはずなのに。

友達だった

僕たちは今日、キスをした。

ただ、傍にいればいい。(前書き)

キスの経緯が明らかに。

て、ほどのものじゃないですが……

ただ、傍にいればいい。

先に言い出したのは、俺だった。

今まで色んな彼女と付き合って一週間……いや、5日間もったことなんてなかった。

その日を迎える前に必ずフラれてしまう……

なんたる低墮落

それと同時に、渡仲霞>トナカ カスミ<彼にクッションになってもらう日々が続く。

もうフラれる事には、馴れてしまった。

けど、胸の痛みには馴れることが出来ない。

クッションになってもらってる間、霞は何も言わない。

ただただ、クッションになる。

慰めてくれるわけでも、

宥めるわけでもない。

ただ、黙ってそこにいてくれる。

それが、妙に心地いい。

それが壊れてしまったのは、夕暮れの今日……

「泣くな……、睨>タシロ<」

「うるせー、グス……女にフラれたんだから……グス、泣くだろー、

グス……がー……」

STの後、それまで強がって作っていた笑顔が崩れた。

霞が、放課後一緒に数学の課題をやるうと誘ってくれたから少しは気が紛れるのかと思ったけど……

ダメだった。

やっぱり傷は深い。

優しくされればされるほど、涙が込み上げる。

「ここ、教室」

「知ってたよー……」

「だから、泣き止め」

そう言つて、霞の左膝と右膝の間に腰をおろす。

「うるせー……、クッションだろー？大人しくしてろよおお……」

霞の両膝にすっぽりと収まってしまう自分の体の小ささにすらも、悔しくなつて涙が溢れる。

「ガキかよ……」

「うつせー……、彼女のひとりも出来ないお前に、グス……なんか、言われ……グス、たくないんだよー……」

いつもならすぐに“睨みたいは何回もフラれたくないからな”と毒づくの……

「……俺の事なんて、どーだっていいだろ」

今日は、返答が違った。

少し気になったけど、それはそれで素直じゃない返答だったから霞
に対立して、乱暴になる。

「うつせえー……」

「……はいはい」

宥められてから10分……だと思っていた時間は、30分以上経っ
ていた。

せっかく誘ってくれたのに課題には、一切手がつけられなくなりそ
うだ。

「霞いい……?」

「何、もういいの?」

そう言つて頭を撫でられる。

本当なら、せっかく誘ってくれたのに課題進められなくてゴメン。
と素直に謝るつもりでいたのに……

「……………」

「どうした?」

うまく言葉が出てこなくて……

普通なら、とても考えられない。

ましてや、男のコイツに……

「寂しくなった……」

「は？」

甘えてしまうなんて

頭に触れていた霞の手が急に離れたから……と、頭の中で霞に全て責任を押し付けてみる。

そうだよ……、霞が悪いんだ。

だから、こんな意味の分からないことを言ってしまったんだ。

「俺、今寂しいよ……」

「だから、新しい彼女探すんだろ？さっき散々言ってたじゃんか」

突き放された言い方になんか、急に……

そう、壁を感じたんだ。

そしたら、俺……

「今……！」

「は？」

また、ワケわかんない方向に話を進めて……

「今、寂しいんだってば」

今まで散々使ってきた上目使いでオトす。

男の霞相手に……

というか、意中ではない相手に『オトす』という表現が合っているのかは些か確かじゃないけど……

「そんな目で言われても……、俺に女は見繕えないからな？」

何をむきになっているのか……

何をこんなにイラついているのか……

「……がう」

「え？何て？」

さっきまでの涙と鼻水で声がうまく出ない。

ただ、何を思ってたのか。

「霞いー？」

「睨？何か変じゃね？」

この時の霞が、他の女……いや、霞は女じゃないんだけど何処の女よりも色っぽく魅せた。

一言で言えば、正真正銘男のコイツに見とれてしまったんだ。

「……………」

「睨……？」

今思えば、そう……

この時の俺の発言が2人に火をつけたのかもしれない。

静かに霞の肩に手を置く。

少し伸びてきた髪の毛が、甲に当たったり当たらなかったりするの
がくすぐったい。

「キス、て男でも同じなのかなあ……」

予想以上に色っぽい。

……自分で言ってしまうのもなんだけど。

「睨、やめろって!!」

こっちの反応も予想外。

俺が想像してた以上に頬を赤らめていたし、
どこか可愛いというイメージを過らせた。

はらわれた手を再び霞の肩に寄せる。

「お願い、今だけ俺のもんになつてよ……」

「睨……」

今の俺は、こんなにも……

「霞……」

「けんな…よ」

ふざけんなよ、と言った気がした。

ただ、霞の声がさっきの俺よりも掠れた声だったから正確には、聞き取れなかった。

「え？」

「すんだろ？」

両膝に挟まれていた身体は、いとも簡単に霞の膝の上に乗せられていた。

「あ……ああ、うん」

「前の女だと思ってるよ」

……この体勢は俺のが女の位置なんじゃないかと思ったけど、欲を満たす為にはそんな事はどーでも良かった。

「……分かった」

たった1度の浅いキス……

何か、大切なことがあったわけじゃない。

このことで、

2人の関係が崩れたわけじゃない。

俺が彼女を作らなくなったわけじゃない。

1週間も経たない内に振られてしまうのも……

霞が彼女を作らないのも……

相変わらずだった。

何1つ変わらない。

言ってしまうば……そう
若気の至りだ。

もしも、2人ここから。（前書き）

睨の部屋で、ってな設定です。

因みに睨家は、母（専業主婦）・父（単身赴任中）
の3人家族

家は、一軒家二階建て

もしも、2人ここから。

どうしたものやら……

俺は、何てことをしてしまったんだろう。

いつも恋愛には、全力投球だった。

コクって、フラれて、それでも諦めないで付き合つとこまで持ち込む……

相手は、半ば仕方なくって感じた。

それでも良かった。

俺がずつと好きでいたら相手だってそれに気づいてくれるって信じてるから……

キスなんて、ただの愛情の確認だと思ってた。

好きだから、キスをして

もっと、相手を好きになって……

なら、俺は何で霞と……？好きだから？

そんなはずない。

霞とは、中学が一緒にいるし高校3年の秋……

そんな気持ちになるワケがない。

なら……、

俺が1度だけだからと迫ったことで、傷ついている俺に気を遣ったんだ。

親友だと思ってた……、

俺たちの関係は、壊れることは無くても少しずつ崩れてしまうのだろうか……

「霞……、」

ぽつりと呟いてみる。

俺だけしかない部屋

音楽のひとつでもかければいいのに、そんな気分にもなれなかった。

「霞……、」

やめておけばいいのに、ゆっくり目を瞑ってみる。

あの時のこと、

思い出してしまうのは分かってたのに……

『前の女だと思ってるよ』

真剣な顔した霞が今までに無いくらい小さな声で発した言葉

「思えるかよ……」

あん時のお前、確実に男の顔してたし

1回だけじゃ……

「は？」

今、俺なんて思った？

1回だけじゃ、

1回……

「ないない」

そんな事思っわけない。

俺は、これからだって女を作るし

今はただ、気に入ってるやつがいなくて……

またすぐに元通りになる。

そう自分に言い聞かせて、10分後ようやく落ち着き眠りについた。

夢の中で、俺は男の顔をした霞に向かってさっきまで自分の頭の中に浮かんでいた言葉を口にしていた。

夢の中の俺は、そんな事なんてないと思いつつも言わずにはいられなかった。2度目のキスは、夢の中で俺からした。

『1回だけじゃ、全然足りなかった』

もしも、2人ここから。
(後書き)

睨……、

まるで乙女ですね
笑

これは波乱か、あるいは……

ああ、今日は母さんいないんだっけ。

友達と京都に出掛けて来るとか何とか言ってた気がする。

「どおりで、静かなわけだ。」

いつもならこんな時間までベッドに潜り込んでたら布団を剥ぎにや
つて来る。

快適だ

さすがに1時まで寝てたら乾燥で喉が痛い。

水分を取る為に一階に降りる。

インターフォン

手に取った500mlペットボトルの水を置くのが惜しくて勢いよ
く半分くらいまで飲み干し、キャップをした。

2度目のインターフォンが鳴って、急かされる。

ペットボトルを持って、リビングにあるモニターボタンを押す。

「はい」

「あ……あの、わたし、えと……少し時間いいですか」

「は、あ……はい」

言葉を噛みすぎて何が言いたかったのか分からなかったけど、悪い
ヤツではなさそうだから表に出ることにした。

「あの……」

誰だ……？

今まで付き合った子の中にこんな大人しそうな子なんていない。
皆、自分を着飾ることで頭がいっぱい。

そんな子ばつかだった。

だから、こんな俺が少し頑張って上目遣いをすれば女なんて簡単に手に入った。「あ、わたし斎梨 瞳>サイナシ ヒトミ<て言います。」

「はぁ……、」

なんていうか、フワフワした子だ。

綺麗な黒髪にカールがかかってて、服装も女の子って感じの白いワンピース。

「……………あの、お」

「あ、何？」

本当にどういふ対応したらいいのか分かんねえ

「友達に小堺 真里>コサカイ マリ<ちゃんって子がいるんですが、七瀬>ナナセ<くんお付き合いされてたんですね？」

「ああ……………まあね。」

その子だつて付き合ってる間もろくに連絡なんて取ってなかったから、付き合ってるかと聞かれたら曖昧なんだけど……

「すみません。勝手に家、聞いたりしちゃって」

「あ、全然」

こういふ感じの子と話したことがないから、どんな態度を取ったらいいのか分からない。

思わず、手に汗が滲む。

「どーしても言いたいことがあつて……………」

言いたいこと？

「どーしても……………」

家まで来て、どーしても言わなきゃいけないこと

「はい。言わなくちゃ後悔してしまう気がして。」

え、まさか……

「な、何？」

……………俺に!?

「あの……………」

「渡仲君の事、いろいろ
教えてもらいたいです!!」

「は？」

これは、波乱の予感……？

波乱、あるいは協力？

「突然ごめんなさい」

「あ、いや……」

玄関の前で話すつもりだったのは、通りすがりの近所の人の冷やし
しが気恥ずかしくてやめた。

ここ一応、俺の部屋

折り畳み式のテーブルの上には、ポテチの袋が散乱しててクローゼ
ットに入りきらなかった服が床に散らばってベッドの上はマンガの
山。

さっきまで握っていたペットボトルをテーブルに置くと、周りに水
溜まりをつくる。

部屋中に効く暖房のせいで水滴が、水滴に重なり重さに耐えられず
に流れ落ちていく。

一言で言うと、男の部屋

一応……男

汚い部屋だけど上がって、なんてありきたりな台詞を吐いてベッド
とテーブルの少ししかない隙間に体育座りのように腰を下ろす。

誰か自分以外の人が部屋に來ると、ここは自分の部屋なのに何故か
落ち着かない。

さっきまで睡眠として用途していたためか、TVも点いてなく静か
だ。

部屋にいる2人も静か。

沈黙に耐えられなくて、当たり障りのない話題を振った。

「ああー、隣のクラス……だっけ？」

「はい。よく知ってますね。」

「女子の事は、何でも知ってるよ」

「そーなんですか。」

自分なりには、少しこの場を和ませられたらと思って、おどけてみたつもりだったけど……結構な胸への突き刺さり

「……………」

「……去年は2組でしたよね、七瀬くん」
「ほえ？」

我ながらアホくさい返事だった。

それを聞いた瞳ちゃんが、初めはほんの少し目を見開いて次にクスクスと笑いだした。

少し、いや結構恥ずかしかったけどさつきとは全然違う反応を見せてくれたから……よしとしよう。

「よく知ってんね。」

「男の子の事は、何でも知ってますから」

「……………」

「……冗談ですよ？」

……冗談も言えるんだ。

「……えと、瞳ちゃんは何組だったの？」

「3組です。」

「あ、霞と同じ」

「……………はい。」

やばっ！！

口から言葉が出てから気づいた。

……もう既に手遅れだったけど。

お互い面と向かっていているけど、目を合わせられないでいた。

それを終わりにしたのは、彼女だった。

彼女のカミングアウトと一緒に。

「いつからだったんでしょうか……もうとっくに好きだったんです。」

「

「え？」

「さっきの……、渡仲くんの事好きになったの去年なんです。渡仲

くんは大人っぽいのに友達多くて、頭もいいし、勉強も出来て1年間学級委員でしたし、皆に頼りにされて凄いなって。」

「凄い？」

「はい。私とは違って、1度しか話したことはないんですけど」

「1回!？」

思わず驚いてしまった。

いや、これが普通の反応だろうな。

「学級委員が、クラス皆にプリントを配っていて……課題をやっていた私にちゃんと齋梨って呼んで手渡ししてくれて」
奇跡みたいだ。

彼女は、そう感じた。

「ああ、私も渡仲くんの人生の中にいるんだあって……」
そう語る彼女の目には、嘘なんてない。

憧れてとか、尊敬とかじゃない……

『霞が好き』

好き、好き、好き……

ただ、それだけしか写っていない。

「俺なんかに、なんか出来る事なんてあるのかなあ？」

俺が、霞としてしまったことは消えない。

俺が忘れてしまっても

霞が忘れてしまっても

その事實は、決して消えたりなんかしない。

「見てるだけでいいんです。けど、誕生日とか……小さな事だけお祝いさせてもらえたらって」

「誕生日……？」

そつえば、今年はまだ祝ってなかった。

もう祝えるかどうか曖昧な関係になっちゃったけどな。

たしか……、

「……………明後日だ」

ポツリと呟いたにも関わらず、瞳ちゃんがしっかりと聞き取ってい

たことの方がビックリした。

「明後日……」

「あ、ごめんね？明後日じゃプレゼントなんて用意出来ないよね……」

……

……役立たず

「あの……着いてきてくれませんか？」

え……

「今から、プレゼント買いに」

「え？」

もうすぐ卒業式。

外は冬なのか春なのか、手袋はいるのかマフラーはいるのか、厚着がいいのか薄着がいいのか

全部が曖昧な季節なのに、俺のすぐ目の前には確かに春が近づいていた。

友達とかでもいいけどさ。

寝、いい加減起きてきなさい！！なんて田舎のお袋のような起こし方をする母親

寝癖で髪の毛が上手くまとまらずにイラついている妹

出張で家を空けている父親

いつもの朝だ。

ふうふうんー

と、いつもより長い伸びを試みる。

まあ、この行為をしてもいつもの朝となんら変わらないのだけれど。結局、いつもと同じようにまた月曜かよ、と思う。

ただ違うのは、いつも一緒に登下校していた霞に会いたくないこと。いつもの電車よりも1本（と言っても8分）早くしようと思ってること。

少しだけど、先週の月曜と今週の月曜は違う。

リビングへの階段を何でもなかったように軽快に駆けていく。

おはよ、と語尾の短い挨拶をしたら、今日日直だから早く行かなくちゃ。なんて在り来たりな嘘について朝食を取らずに家を出る。

母サンからしたら、今まで1度も無かったのに？とかなんとか疑問に思うだろうけど…、そしたらまた新しい言い訳を考える。

卒業したら、電車の時間だけ気にして乗れるようになるのだから。

「行ってきた…」

目の前の光景にさっきまでの笑顔が凍りつき、言葉が喉で詰まってしまった。

「朝から元気だな、おい」勢いよく閉めたはずの扉は、いつまでたっても閉まり終えた音しなくてまるで時間がとてもゆっくり進んでいるんじゃないか？という気にさせた。

「ガツコ、行こーな」

いつもの霞は、

いつもの姿で、

いつもの笑顔で、

いつものように微笑んだ。

優しい雰囲気は、何一つ変わってない。

「何、俺見ていきなり雰囲気変わったな。」

「な……にが？」

「あんなに元気だったのに」

こんなバレバレな態度を取っておいて何だけど、少し微笑んで細くなった霞の目が、俺を解りきったような目をしていたのが急に恥ずかしくなって、

「どうせ、俺とのが申し訳なくなつて1本早い電車で行こうとしたんだろ？」

「何で……、」

何で……

何でこいつはいつも……っ

いつもいつもそんな目で見んだよ……っ

何で、そんなこといちいち……

「わかんだよっ！！なんか、ムカツクツ」

「分かるよ、睨の事なら何でも分かる」

この時、

嬉しかったのも事実で。

「分かるわけねえよ」

「分かるっての」

何でもない会話が出来たのが、

楽しかったのも事実で。

「てか、あんなことで関係崩れたりしない。」

あんなことという卑下したようなひとくりに纏まられるのが、

悲しかったのも事実で。

「何でだよ……」

「俺ら、ずっと友達じゃん」

初めて意識した、霞は友達なんだ。
当たり前なのに……

俺の中の何かが反応して、心臓のあたりが妙に痛い。

息苦しくて……、

目まぐるしい……、

「友達……」

「……そ、だろ？」

「……あ、ああ。」

肯定するのにも、自分の中のもう1人が背中を押さないと言葉が上手く出てこない。

「拒否られたら、どーしようかと思った。」

「なわけ、ねえよ」

『友達じゃん』

初めてちゃんと意識した言葉。

『ずっと友達じゃん』

当たり前前の事なのは自分も霞も、周りにいる誰でも分かっている。
ずっと友達……、

正体は何だか分からない心臓のずっと奥にあるものがギュッと掴まれて、締め付けられる。

ギュウギュウでもギシギシでもない音を立てて俺の中へと侵食していく。

ずっと友達……、

その言葉に少し……いや、結構傷ついたもの事実だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7753r/>

ずっと、ここで待ってるのに。

2011年10月8日21時04分発行